

# 夏休み年少少女名作鑑賞

少年時代から鑑賞眼を養い高めるといことは、将来の人間形成に役立つものが多分にあります。そこで、夏休みの期間に少年層でも理解できうるであろう心に残る映画を選んでここに特集をつくりました。ジュニア版フィルムセンターとして、御家族ともどもご利用いただきたいと存じます。

1983年7月 フィルムセンター

■上映は午後3時より1回のみで、午後6時15分開映の「ジョン・フォード監督特集」とは全館入れ替えとなります。

一般 250円・学生 140円・小人 100円

期 日	題 名	製 作 年	監 督	出 演 者
8月8日(月)	3時 路傍の石(124分)	日 活・1938年	田 坂 具 隆	片山明彦、滝花久子、山本礼三郎、小杉勇
9日(火)	3時 次郎物語(85分)	日 活・1941年	島 耕 二	杉幸彦、杉裕之、轟夕起子、杉村春子
10日(水)	3時 虹をかける子どもたち(86分)	エキブ・1980年	宮 城 まり子	ねむの木の子どもたち
11日(木)	3時 ビルマの竖琴(115分)	日 活・1956年	市 川 崑	安井昌二、三国連太郎、三橋達也、北林谷栄
12日(金)	3時 愛と死をみつめて(117分)	日 活・1964年	斎 藤 武 市	吉永小百合、浜田光夫、笠智衆、内藤武敏

## 短篇・文化・記録映画特集

これまでわが国では一般的な傾向として、映画を観る人たちの間に、映画と言え長篇劇映画を意味するものとして長篇映画のみを重視し、短篇・文化・記録映画を軽視する嫌いが見られないでもありませんでした。しかし、短篇映画には(珠玉の短篇)という言葉にみられるように短篇としての独特の良さがあり、文化・記録映画には文化史的にみて興味深い題材が映像表現されているばかりでなく、社会的にも貴重な映像が数多く含まれていて、長篇映画にはみられない別のすぐれた価値があるといえます。

フィルムセンターでは、これまでに作られてきた数多くの短篇・文化・記録映画の中から、優れた価値を有する作品を選びだし、それぞれのテーマに従って1時間半前後の番組を編成して、原則として毎月第一土曜日の午後4時から《短篇・文化・記録映画特集》番組を上映することにいたしました。単に短篇・文化・記録映画愛好者の方々のみならず、広く一般の映画観賞者の皆さんの御利用をお勧めいたします。

1983年7月 フィルムセンター

★午後1時30分開映の回が終了し、全館入れ替えの後に出札を開始し、午後4時より開映致します。

★先着順にて239名に達し次第入館を締め切ります。

一般 250円・学生 140円・小人 100円

8月6日(土) 午後4時開映

— 荒井和五郎影絵アニメ選集 —

### お蝶夫人の幻想

朝日映画社1940年作品

製作・切抜・構成・撮影＝荒井和五郎、飛石伸也 作詞・作曲・独唱＝三浦環 合唱＝三浦環声楽団 白黒・12分

### ジャックと豆の木

朝日映画社1941年作品

原案・構成・撮影＝荒井和五郎、飛石伸也 音楽＝福田宗吉 演奏＝朝日映画管絃楽団 白黒・15分

### かぐや姫

朝日映画社1942年作品

原案・構成・撮影＝荒井和五郎、飛石伸也 作詞＝横尾三千代 作曲＝小船幸次郎 独唱＝葦原邦子 演奏＝フィルハーモニー四重奏団 白黒・25分・無声版

### マッチ売りの少女

日本漫画映画社1947年作品

製作＝本多春雄 脚本・演出＝荒井和五郎 作画助手＝須賀嘉行、岡見弟三、柿田清二、高木祐子 音楽＝安倍盛 舞踊振付＝石井漢 演奏＝ピクチャー室内管絃楽団 録音＝東亜発音 白黒・10分

影絵・人形映画作家の荒井和五郎(1907年生まれ)は幼少の頃から映画の魅力にとりつかれ、日本歯科大学に在学中、当時公開された影絵映画「アクメッド王子の冒険」(1926年、ロッサ・ライニガー監督)に強い感銘を受け、ついに医師仲間の飛石伸也との協力を得て第一作「黄金の鉤(つりばり)」を発表した。これは神話(海彦山彦)の物語を素材とした作品で、自主作品として9.5ミリ版として作られたが、完成度の素晴らしかったところから、35ミリ版に作り直して東和商事の配給で新宿文化ニュース劇場で封切られた。

次に発表されたのが「お蝶夫人の幻想」で、歌劇「蝶々夫人」に題材を求め、優雅な動きと幻想味あふれるこの作品は、日本影絵映画の代表作ともいえる出来栄えとなった。なお、録音の際に原曲の著作権者より多額の著作権料を要求されて困難に面した時、当時のプリマドンナ三浦環女史の全面的協力を得、彼女の新たな作詞・作曲を得て完成されたという。

「ジャックと豆の木」はイギリスの民話を影絵化したおなじみの話であり、「かぐや姫」では荒井が得意とする日本の幻想的世界を影絵化しており、その抒情的世界は他の追随を許さぬものがあり、故大藤信郎と共に日本影絵史に大きな足跡を残している。

9月3日(土) 午後4時開映

— 西尾善介選集 —

### 黒部狭谷

日本映画新社1957年作品

企画＝関西電力株式会社 製作＝堀場伸世、藤本修一郎 脚本・演出＝西尾善介 撮影＝林田重男、丸子幸一郎、潮田三代治、藤田正美、今村俊輔 編集＝伊勢長之助 音楽＝別宮貞雄 解説＝藤倉修一 録音＝国島正男 カラー・35分

### 黒部狭谷第2部 地底の凱歌

日本映画新社1959年作品

企画＝関西電力株式会社 企画担当＝水島羊之介 製作＝堀場伸世、藤本修一郎 脚本・監督＝西尾善介 撮影＝藤田正美、潮田三代治 撮影助手＝浅野恒夫 音楽＝別宮貞雄 解説＝藤倉修一 録音＝国島正男 カラー・53分

記録映画作家西尾善介(1915年生まれ)は、1937年に東宝映画の前身であるP.C.L.に入社して撮影部に所属、戦後は演出部に転じて木村莊十二監督らに師事した後、短篇劇映画「吾問の少女」で監督としてデビュー、52年には「パチンコ必勝法」「落語大学」の作品で興行的にヒットさせた。その後、東宝映画映画部の解散にもなってフリーとなり、記録映画の分野で精力的に活躍を始めた。

「黒部狭谷」と「地底の凱歌」は、当時の土木工学の粋を集めて開始された黒部川第四発電所の建設記録映画であり、スケールの大きな記録映画作品として数々の受賞に輝き、西尾監督の名を高からしめたものである。

黒部第四発電所の建設予定地に選ばれた黒部狭谷上流地点は、昔から人間の侵入を厳しく拒んできた難所である。そこに建設基地を設置するにしても、標高1300米の御前沢に鉄やセメントを運び上げ、悪条件のもとで人々の苦勞が始まる。これはほんの一端であり、立地条件の悪さからダム建設地点までの連絡路は全部トンネルであり、発電所も地下に設置するためのほんの入口にしかならない。建設の完成にはこれより7年を要するという前代未聞の難工事の始まりである。映画は黒部の大自然と四季おりおりの美しさを描きながらも、その前では人間の知恵や力をも打ちこわす大自然の力を余すところなく描いている。人間と自然との一進一退の対決ぶりは、劇映画をものごんばかりのドラマティックな迫力を生み出し、スタッフ一同の苦勞の様子が推しはかれるであろう。

この作品の脚本・監督にあたった西尾監督は、本年(1983年)1月29日に措しまれつつ逝去された。